

私の母は、十年前に再婚した。相手はロシア人。その人は、話かけてもクスリともせず、百九十センチ近い身長の子もあってひどく威圧的に見えた。

病気で亡くなったお父さんは、いつも笑っていて優しく、その思い出が、なおさら私とその人を遠ざけた。結局、彼のことを一度も「お父さん」と呼ぶことはなかった。高校の卒業式、大学の入学式、成人式さえも、父は来なかった。

夏休みに、どこか海外に行こうと思った。旅行社のポスターに目を走らせた時、あの人の故郷であるロシアが目にとまった。行かなければ、なぜかそう思った。初めての海外旅行、そして、ひとり旅。

ロシアには、無表情で歩く人々、ぶっきらぼうな店員、あの人に似ている人たちがたくさんいた。父が亡くなり、あの人が家に来た直後のような、とても心細くて、嫌な気持ちになった。

だけど、私が葉書の送り方がわからず困っていた時、一人のロシア人が私を助けてくれた。あの人のような無表情で、だけど暖かい手で葉書をヒョイと取り上げると、窓口に行き手続きをしてくれた。五分後、切手の貼られた葉書はポストへ吸い込まれていた。ありがとう、拙い英語で言う私にその人は何かを言って去って行った。ホテルに戻って、ネットでその人が言った言葉を調べた。

「どういたしまして」
だった。

そうか、この国の人たちは優しいんだ。ただ、笑顔が日本人のそれと違うだけ。

私は、家に電話をかけた。母に、あの人のことを聞くために。

あの人は、本当は卒業式にも、入学式にも、成人式にもこっそり来ていた。恥ずかしいから、娘との接し方がわからないから、内緒にしていたらしい。一度、私のためにお弁当を作ろうとして、失敗して、そんなエピソードをたくさん教えてくれた。

初めての、ひとり旅。

一人のロシア人がくれた親切で、私はあの人と話がしたくなった。

今度家に帰ったら、「お父さん」と呼んでみよう。

きっと、無表情の奥に、笑顔が見えるだろう。